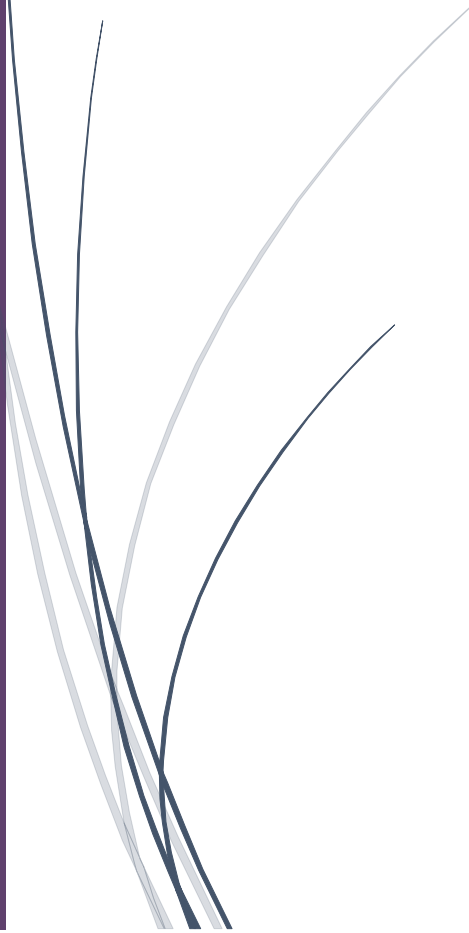




平成27年度

読書会感想文



市立竹原書院図書館

★平成 27 年度 課題本

開催日	書名	編著者名	出版社
4 月 22 日 (水)	小さいうち	中島 京子	文芸春秋社
5 月 27 日 (水)	光圀伝	沖方 丁	角川書店
6 月 24 日 (水)	楽園のカンヴァス	原田 マハ	新潮社
7 月 15 日 (水)	わたしがいなかった街で	柴崎 友香	新潮社
8 月 26 日 (水)	職業は武装解除	瀬谷 ルミ子	朝日新聞出版
9 月 16 日 (水)	李陵・山月記	中島 敦	文芸春秋
10 月 28 日 (水)	おとなの調べ学習！ ～ローマ帝国って何だっけ？～		
11 月 25 日 (水)	新・ローマ帝国衰亡史	南川 高志	岩波書店
12 月 16 日 (水)	アンのゆりかご	村岡 恵理	マガジンハウス
1 月 27 日 (水)	さきちゃんたちの夜	よしもと ばなな	新潮社
2 月 24 日 (水)	似ない者夫婦	津村 節子	河出書房新社
3 月 23 日 (水)	今年の一冊		

◆ 4月課題本 ◆

『小さいうち』

中島 京子／著 文芸春秋社

小説は、すべて虚構である。たとえモデルがあっても、歴史的科学的に証明をする必要はないわけだから、どんな構想であっても、読み手としては、作者の視覚についていくしかない。

最近、コンパクトデジカメを買った。望遠30倍というカメラで、レンズ交換なしで広角から望遠まで撮れる。望遠30倍となると望遠鏡なみに、遠くて判別できない顔もぐんと引き寄せられて鮮明に迫ってくる。ただ、ピントが合っている被写体は浮き上がってわかるが、周りがどうだったのかは、モニター画面から外れるのでわからない。望遠設定は、景色の中のどの部分が画面にクローズアップされているのかを写さない。

今回の『小さいうち』は、最終章になるまで、「小さいうち」の中の出来事にピントを合わせた望遠設定として固定された。

昭和10年11年という時期は、歴史的には「天皇機関説」問題や「二・二六事件」などが起きた時代だが、主人公の女中タキにとっては、〈平和な情景しか思い浮かばない時代〉なのだという。昭和14年になり、国全体は国防意識で戦争準備に向かうが、タキは、旦那さま、奥様、おぼっちゃまと、相変わらず「お靨」など「お」のつく暮らしを続けている。〈昭和16年、戦争が始まってなにごよかったって世の中がパッと明るくなったことだ〉といいながらスキーに出かける小さいうちの人々。昭和17年の東京初空襲を経験し、戦争が決戦状態に入ったという状況の中で、「小さいうち」の奥様の恋愛事件が語られる。ズームアップして、タキの目に映ったままに記される状況が続くと、読み手は何か抜け落ちた焦りを感じてしまう。クローズアップすることで、視界から隠れたものがあるだろうにと、探しものをしたくなる。全体はどうなのかと、ズームレバーを広角の方へ戻したくなるのだ。

「小さいうち」は、女中のタキ、時子奥様、恭一おぼっちゃまの円の内側の世界。ここへ焦点を当てると、周りはぼんやりと消えてしまう。表紙の絵が象徴的である。円で囲まれた世界と円の外側の世界と二つの世界が同時進行なのに最終章まで交わることがない。

日本中を巻き込む太平洋戦争の最中に、視界を狭めた「小さいうち」の平穏な出来事を並べていく作者の意図は何だったのだろうか。

どんな災難の中でも、渦中に居る人は、そんなものだと思い暮らしているのかもしれないと考えると、現在の日本に通じる警告と言える。

終戦間際の疎開児童と暮らすタキが、〈だいじなことを何も知らずに〉〈大切なことを追い越して〉日常に埋没している姿を意識として描写したこの2行の文章は、作者の執筆理由を語るのではないか。

全体が見えなくなるという望遠の落とし穴に気付いて広角に切り替えても、広角は、端のフレームがゆがんでいびつに写るという特性がある。カメラを手にした私の目は、かくして欠如を含んでしまう。作者の中島京子氏は、それはカメラの話だけではないのだと言うのではなかろうか。



～かわらぬもの かえてはならぬもの～

「三日みぬまのさくらかな」といわれる日本の花を代表する「さくら」も県北の山間に時季を移したようです。でも今年の「花」はなんだかおかしい天候に翻弄されたようです。まるで世の中の動きのように……。その思いを強くするような今月の課題本でした。

長男の大好きな絵本が、今月の課題本と同名の『ちいさいおうち』（バージニア・リー・バートン）でした。どこに出かける時もその本を持っていたので買い替えをするほどでした。なぜその本が好きだったのか……。尋ねたことはないのですが、自分の大切にすることは、どんな外圧からも守らなければならないと、柔らかな色あいのリンゴ畑のひろがる画面から感じる事ができたのだろう、と思うことにします。

「ちいさい」が「小さい」と表現された中島京子作の小説の最終章には、バージニア・リー・バートンの『ちいさいおうち』と対比するようにイタクラ・ショージの『小さいおうち』が登場する。この最終章で、中島京子氏のこの作品に込めたテーマを読み取れたように思う。（また現実の本を登場させての対比は、この物語のしかけでした。）

イタクラ・ショージの絵は紙芝居形式で描かれている。丸囲いのなかの世界とそれとは交わることの無い外の世界が一つの画面に描かれているのだ。文字は書かれていないが、まさに彼が見た平井家のことである。

時は、昭和モダンの頃。ひたひたと静かに「戦のおと」が感じとれる頃である。中流階級の家庭に女中として奉公した山形出身のタキ。「女中」としての三つの役目を教えられそのことを貫いたかしこい女性であった。戦時下のなかで「女中」として奉公先の家庭を守るための行為であったが、そのことが良かったのかどうかの拘りもあったのであろう。誰かにそのことの真意を分かってほしいと妹の孫（甥の二男）健史に自分の生活を綴ったノートを託す。健史は、大伯母の遺したノートを頼りにタキの目を通して語られる昭和モダンの「日常の生活」の中から、タキが守ろうとしたこと、その時代を生き抜くために守らなければならなかったことを体感していく。

日常の何気ない生活が壊される危機感は、この物語の昭和モダンの頃と似ていないだろうか。「丸で囲んだ世界」の外は、明るい色であらわせなくなっている。タキさんの伝えたいことは、たんに家事のこなし方ではなく日常を大事にする生き方の「ものがたり」だったのではないだろうか。

この感想文を書いているとき、タキさんと同時代を生きた師が亡くなりました。94歳でした。タキさん同様に独身でした。ピアノの師でもあり中学校の三年生の時の担任であり音楽の先生でもありました。仕事についてからも私に何かよきことがあった時は「良かった、良かった。」と声を掛けていただきました。発表会にも見に来てくださり褒めてくださいました。タキさんとの師がどこか重なるような気がしています。

この師の「こえ(おと)」を身近な方が拾ってくださればと想いました。



昭和レトロな素敵な洋館。

映画もみました。

女中目線ですが、うやうやしく心を込めて仕えています。奥様も、女中に家事を教え込んで、2人が共に幸せに暮らしています。

オリンピックと産業のさかえる日本のすがたがありますが、戦争へと暗いかげりが広がっていくさまがよくわかります。

幸せでも、政治と世の中、そして恋愛はいつの時代も人間の思うようにはいかないことがわかります。華々しい世でも、実際は翻弄されながらも、何かを信じようと生きる人間のむなしさを感じました。



小さいおうちの中で大きな出来事が起きていた。絵本のちいさいおうちは外側のいろいろなことを書いた本。それが一緒になったりで、よくわからないところです。



昭和初期の比較的裕福なある家の日々の様子が、女中タキの目を通して淡々と描かれている物語。タキと奥様が、お互いのことを大切に思い、本当の家族のように信頼しあって暮らしている様子は純粋で清々しいものを感じた。しかし、読み進めていくうち、直接的には描かれていないのに、戦争の怖さというものが深く胸に残った。

家の中をズームインして、平和な明るい部分を延々と描くことで、かえって描かれていない背景、ズームインした円の外の世界の暗さを際立たせているというお話に納得。

この物語にあるように、日々、目の前の事に捉われている間にいつの間にかひたひたと戦争の足音が近づいて来るのだろう。そして、平和な家庭は、大きな時代のうねりに取り込まれていくのだろう。気づいた時には手遅れで誰もが戦争に飲み込まれてしまい、それぞれの人生も生命も奪われてしまうのだろう。

本文に「大事な事を何も知らずに私の日々は続いた。いつの間にか私の毎日は大切なことを追い越した。」という心に残る表現があることを先生が取り上げられた。私は、まさに現在の日本と重なった。今、戦争ができる国へと大きく角を曲がろうとしていることに気づかずに、本当に大切なことに気づかずに、私たちの日々が続いていく。そのことにあてはまるように思えて仕方がなかった。



◆ 5月課題本 ◆

『光圀伝』

冲方 丁／著 角川書店

751ページの本を読み終わると、ちょっとした達成感を覚える。一人の人物の一生だから、700余ページでは足りないだろうけれど、研究者ではない読み手としては、いくつかの出来事に絞った方が読み取りやすい。前半は「義」について、その後藩主としての「政道」、そして生涯追い求めた事業「史書編纂」にまつわる話。751ページから、大まかに三つの単語を取り出してみた。その間には、光国の多彩な人脈形成が語られる。

徳川御三家の一つ、水戸の徳川家2代目を継ぐ世子となった光国の「義」とは何だったのか。繰り返し使われる「義」の文字だが、光国の心を占めていたのは、本来、長男相続であるべきだという「義」である。だから、次男である自分が兄をさしおいて世子とされてしまった経緯を「不義」と言う。その「不義」を、兄の子を養子として迎え、いずれ藩主とすることで「義」に立ち返らせようとする。我が子がやどっても堕胎させようとし、そうすることが「義」なのだから、今で言えばとんでもない「義」である。しかし、光国から見れば、我が子を利することはせず、道を守ったことになるのだから「義」なのだ。その後も〈我が大義〉〈愚かな義〉〈義が砕ける〉などと使われていて、封建時代の儒教の「義」が300ページ近く書かれている。こうし

て見ていると、「義」は、時代の潮流によって変化するものであり、人によっても異なるのだと実感した。現在、私達の耳にする「正義」も、多種多様であり、これこそ正義だと掴むことは危ないことだと思う。

光国と言えば、水戸黄門漫遊記となるのだが、この作品にもあるように、光国は殆ど旅をしていないそうだ。江戸と水戸を行き来しているだけで、今や有名な全国行脚の記録はない。明治の後半期から、黄門様を旅させて、各地の悪人をやっつけさせた庶民の仮託のまぼろし譚のようなのだ。しかし、作者は黄門様漫遊記をさもありなんと思わせるように、熱血漢ぶりや、行動力、知力などをたっぷりと描いている。

光国自身の望んだ大事業は、歴史書編纂であったと作者は記す。〈日本には史記がない〉と言わせている。日本にも、それまで歴史書はあったわけだが、いずれも編年体で書かれている。光国の望んだ歴史書は、『史記』のような紀伝体であった。『史記』130巻の半分以上は列伝である。人の一生、一国の運命を述べる紀伝の書にしたかったのだ。司馬遷は、宮刑という屈辱に耐えても生き延びて歴史を書き残したかった。様々な人物の人生を描くことで歴史の大きな流れを解き明かし、過去を通して今を未来を見ようとしたのだ。光国も、林家が筆を執る官僚的史書ではなく、司馬遷の思いがのりうつったような連綿と続く人の生死の記録を望み、40年近くかけた編纂事業を人生の柱たる事業と考えていた。

「記録は実に恐ろしいと思う。世界をみなおし、考えなおすことになるからである。」中国への従軍も経験した武田泰淳は、著作『司馬遷』の中にこう記す。

光国の器の大きさはあるだろうけれど、それにしても、ページ数が多すぎないか。シングルのウイスキー水割りをダブダブと飲むより、オンザロックをオーダーしたい感じだった。長編と言っても、『宮本武蔵6～8巻』（吉川英治）や『徳川家康26巻』（山岡荘八）などとは趣を異にする。

例会の冒頭で、しばらく『光圀伝』の表紙カバーを取り上げて語り合った。橋本雅邦の竜虎の屏風絵のうち、虎を使っている。光圀を虎に模しているのはうなずけるが、どうもオンザロック的引き締まった文体や量の方が、虎には似つかわしいと思うのだが。

突然出てきた表紙絵の話題だったので、図書館に事前資料請求ができていなかったが、すぐに資料をさがしてもらい、話の途中でも、ピッタリの資料を持ち込んでもらえて、図書館でする読書会の醍醐味を味わった。膨大な智の蔵である図書館の資料の中から、欲しいと思う物を手渡してくださるライブラリアンあつての楽しい読書会である。



～「記録」するとは～

「まずは読み終える事。」を目標として読み進まなければ読書会の日までに最後まで到達できないのではと……。700ページを超える厚さの中には、作者、沖方丁氏の熱い思いが込められていた。表紙(カバー)絵から今回の読書会は始まりました。

表紙のカバー絵には四肢で岩場を踏み、空を見据えた虎が描かれている。その眼の先には龍が描かれていた。といっても本の装丁から辿り着きわかったことだった。装丁者も作家の想いをカバーの絵や、表紙の紙面の色などに表すかを考えぬいたことが、ここそこに込められた「あつい想い」の1冊であるにはちがいない。光圀の字は(子(し)龍(りょう))であったはず。であるならこのカバーの虎はだれを、何をあらわすのか……と思いめぐらすのも本を読むひとつの愉しさであることをあらためて感じた。

全篇を流れるテーマは、「義」であろう。光圀は、冒頭で家臣の藤井紋太夫を手に掛ける。なぜそうなったのかを光圀の生涯を通して語られている。藤井紋太夫を殺めたことは事実であるが、その事実から話を構成していくこと、そのことで読者がわくわくさせられるのは作家のペンの力にほかならない。江戸幕府が戦うことを止めた時代にあって政治の側から時代を変転させていくことを司らなければならなかった光圀の心にあったものは「義」であった。

幼少期には、実父頼房からは、兄をさしおいて世子として扱われた。そのことはあの時代の家の考え方からすれば、様々の理不尽なことや苦難があったと想像できる。

しかし、自分の次の藩主を兄の実子である綱條としたことは、光圀の「義」の表れのひとつと考える。青年期の昂る気持ちを抑えきれずに傾奇者として暴れた何年間も光圀にとっては、その後の人となりへプラスの働きをしているだろう。そして、18歳の時の自覚と立志を達成させるために『大日本史』を中国の史書にならい「紀元体」で編纂していった。この事業にとりかかるには、光圀自身の変革があった。光圀が範としたものは司馬遷の『史記』である。司馬遷は、「歴史」を書き残すため屈辱に耐えながら記録していった。歴史書とは、人がどう生きたか、過去の事実を明らかにするだけでなく読み手は人物を批判し、自分の在り方を正すことが出来るものである。また国の歴史書を作るということは、後世の人が、国の本来あるべき姿を明らかにしてその変遷の跡を見定め、将来の国の在り方や理想をもつことができるようになるものでなければならない。歴史書の重要性を光圀は司馬遷の『史記』から学んだ。

この話は、最後の紋太夫の死が再度描かれる。光圀への義に生きた紋太夫は、光圀を暗殺する事が、自らの大義であると考えたのではないだろうか。光圀の義とする「王政復古」の理想は、光圀が自分にとっての頂点であり、大義と考える紋太夫にとっては所詮納得いくものではなかったと思う。

「光圀」は今に残る偉業(水道施設、史書編纂等)からブラウン管から流れる「黄門さま」のように庶民に溶け込んでいっている。そして最終的には「この紋所が……」に繋がっていくようにも思えた光圀一代記だった。



700ページの大長編、初めてです。そして、苦手な時代劇。

いきなり殺された人の頭を持って歩く幼い光圀。

そして、特別な刺し方をする殺人。

読むのをやめようかと思いましたが、まあ、がんばりました。

後は光圀の生い立ちでした。

父親からきたえられ、支配者としての後継者選び、支配者としての苦悩。

以外にも、寺神、仏教がきらいでうちこわそうとしていました。

そして儒教を学び、史記を書きしるし、将来のための日本を常に勉強し、図書館みたいにしていました。

時々、人々の居酒屋に行っては、ディスカッションをして、遊びまでしていました。

光圀の庶民を思う気持ちと、日本の将来を思う気持ちがよくわかりました。



まず本の体重を測ってみてください。厚さがすごいですよ。

でも本の内容は裏切らないですヨ。私達がテレビから与えられている黄門様が覆されます。長編に挑戦するのもよいものです。迫力は満点。読後感も重いです。



◆ 6月課題本 ◆

『楽園のカンヴァス』

原田 マハ／著 新潮社

実に多くの画家の名前が登場する。いくらかは、名前をみただけでその人の絵が浮かんでくるが、聞いたことのある名前でも、どんな絵であったかわからない事の方がはるかに多い。絵画の話を読みながら、記号としてのカタカナ名を無味乾燥の状態で読んでいくのは、いかに言ってもつまらない。久しぶりに、自分の書棚から『世界の美術』の全集を取り出して回りに並べ立てた。古い本のにおいがした。そういえば、これらの美術全集に手を伸ばしたのはかなり前のことだ。

実は、ピカソ展に行って、ピカソの若い時代の素描の正確さに驚いた記憶がある。アンリ・ルソーよりピカソの方が生き生きと残っているわけだ。ルソーの作品展もあったかもしれない

が、思い出せない。それだけの知識で美術史を紐解くようなこの作品を読むのだから、作者には申し訳ないことだが。

美術史？と思いはしたが、これは小説なのだ。二重構造の入れ子式なので、主人公は、ルソーでもなくピカソでもない。早川織絵という大原美術館の監視員をしている女性が外箱として創作されている。その内箱に、アンリ・ルソーやピカソという骨格の頑丈な人物を配して、入れ子式の小説が重厚になっている。

19世紀の後半から20世紀の初頭にかけての絵画の波動は、学校の美術史でいくらかは学んだ。神話や宗教画から踏み出して、近代美術がうごめき始めたあたりのことや、次々に新しい美の発見がカンヴァスに表現されたことも、読んでいる内に蘇ってきた。

しかし、「それだけではない」という作者の声を作品の中から聞きつけた。

〈いくらアートが好きだからって、美術館や画集で作品だけを見ていればいいというもんじゃないだろう？ ほんとうにアートが好きならば、君が生きているこの世界をみつめ、感じて、愛することが大切なんだよ。〉織絵の父の囁きとして書かれている。彼女自身も「ルソーも、アートだけをみつめていたわけじゃない。この世界の奇跡をこそ、みつめていたのではなにか」とルソーの気持ちに気がつく。だからこそ、唯一無二の樂園としてカンヴァスの上にその奇跡を描くことが出来たと織絵は納得していく。

外箱は、MoMAが所蔵するアンリ・ルソー「夢」と、同じ構図の「夢をみた」という想像上の絵を導いて来て、その真贋を競う早川織絵とティム・ブラウンの7日間を模様としている。ピカソとルソーをカンヴァスの下絵とし、さらにその上に描かれたようなこの二人。競争相手の男女がやがてお互いに引かれて妊娠となり、混血の娘である真絵が誕生するという筋書きをかなり早くから予想させる。ところが、そんなありきたりの展開にはならない。あくまでも画家ルソーを追求め、ルソーとヤドヴィガの間の物語を史実もないまぜにして描いてあるから、ちょっとした知識を(例えば「洗濯船」の夜会を)足場にして想像上の展開が楽しめる。実際にも、内箱となるルソーの物語のように、彼を夢中にさせた寡婦も居たようだ。しかし、評論の中には、ヤドヴィガは実在の特定の個人と言うより、ルソーが恋したあこがれの女性像という考え方もあるようで、私はそれに賛成だ。単純な組み立てではなくて、構成のうまさにはっとした。こちらが単純な筋を勝手に想像しただけのことだが。

実生活には謎が多いと言われるルソーだが、伝えられるエピソードもうまく取り込んで、白昼夢でも見ているように書き上げられている。

「倉敷の美術館に行きたいね」例会は、落ち着くべくしてそこに落ち着いた。絵は、活字にはならない。やはり、まず倉敷行きかなと思う。



ルソーの描いた「夢」と「夢を見た」のどちらの絵の下に、ピカソの「青い母子像」が隠されているのか？ティムや織江の運命は？何重にも織り込まれたサスペンスに、次々と起こる思

いもかけないストーリー展開に、引きつけられ、ハラハラドキドキ。私は面白くて一気に読んでしまった。

この本の魅力は史実に基づいている箇所も多いこと。当時、日曜画家と馬鹿にされていたルソーの絵を最初に認めたのがピカソだったとは。ルソーやピカソなど画家の人物像やその生涯にもどんどん興味が湧いてくる。史実や画家の人となりを知って絵を見たならもっと興味深いはず。その点図書館で準備して下さった何冊かのアートギャラリーという図鑑が大いに助けとなり有難かった。美術に対する視点を大きく広げてくれた作品だった。

ところで、私は主人公のティムのように美術を鑑賞して一気に作品に引き込まれるほどの強い衝撃を受けたことがあっただろうか？アンリ・ルソーの描いた「夢」という絵の本物を無性に見てみたくなった。大原美術館にも是非行ってみよう。

最後に物語の締め言葉が「夢を見た。君に会う夢を。」で、終わっている所が惜しい。



絵画を見たい…そんな思いをかき立てられる作品です。絵画の世界に入り込む楽しさを教えてください。ストーリー展開が巧みで、最後まで飽きさせません。美術、キュレーターの知識や切ない恋がちりばめられた、上質のミステリーを読んだような、1つの映画を観たような、読後感がありました。美を求めて描くルソーやピカソ、絵を描くことの意味、絵を見ることに目覚めたヤドヴィカ、ジョセフ。絵画を愛する織絵やティム、バイラー。錯綜する想い。名画を得ようとする周囲の人びとの思惑…。欲望の渦に巻き込まれながら、その渦の中心にあるのは、ルソーの情熱です。求めて求めて止まない、かき立てられるような、想い。登場人物達、それぞれの情熱。情熱が、読んでいる私にも伝わってきます。人の心を揺さぶり、感動を呼び起こし、人を動かすのは、情熱なのだと感じました。



ピカソやアンリ・ルソーの時代を中心に絵画史実に基づいての展開の中、アンリ・ルソーの作品とされる幻の一枚の絵をめぐるのミステリーの部分と、若い世代の淡いラブストーリーがあり、また大人の恋の行く末も気になりながら、興味深く読み進みました。

私自身も30数年前になるかと思いますが、アンリ・ルソーの実物の絵を見た時、今までに見たことのない絵で、異様な気持ちを感じたことを思い出しました。その時の絵画展で一番印象に残った作品であり、この時初めて、作者の名前も覚えた程でしたので、この小説は私にとって心に残るものです。



美術のビジネスがよくわかる本ですが、私達の身近な大原美術館での出来事となっています。

絵をみると、画家たちが貧しかったとか、いつごろから売れ始めたかという視点でとらえがちです。

でもこのルソーとピカソの話をきくと、画家たちが何をみて、どう感動して、だれにささげたくて描いたのかがよくわかります。

生活をしていると、ついつい日常をお金に計算して考えがちですが、感動とか熱意、人間関係で考えて、それが私たち自身を豊かにしてくれるものだと、あらためて感じました。



まず大原美術館に行きたくなります。

名画の向こうにあるドラマが面白いです。フィクションとは理解していながら、エッ？本当に、となります。最後の最後までひっぱられますヨ！



あっという間に読んでしまいました。其々の立場でのルソーにかかる熱い思いが伝わってきました。どこがフィクションでどこがノンフィクションかはともかくとして、美術界の裏側なども、さもありなんと面白く、最後まで一気に読ませます。読後は裸婦の手元を確かめに美術館に出かけたくなりました。



◆ 7月課題本 ◆

『わたしがいなかった街で』

柴崎 友香/著 新潮社

時系列表を作りたくなる位、話の順序が飛び跳ねている。例会でも「お手上げ！」が第1声となる。しかし、「これっておもしろい！」という声がすぐ上がる。参加者は、そこでニンマリとしてスタートする。

作品には年月日がきちんと書かれているものと何年前という表現とがあるし、地名はやたらに詳しく出てくる。知らない東京や大阪の地名と沖縄。「読みづらいと思わへんの？」と作者に言いたくなる。しかし、読みづらいのは作品のせいではなくて、もともと、時間と場所(言うなれば世と界)を、時間軸に沿ってしか生きられない身の秩序の中で読もうとするのだから、複雑になるのが当たり前だ。

前半は、これは大変だと思ったが、日時のはっきりしているのは、第二次世界大戦の終戦年や、ベトナム戦争、アメリカでのテロ、東北の大地震(つまり原発事故)、そして今に続く中東の戦争。これらが底流となっていて、時々実際の時間として噴出してくる。戦争は、人間の生死が露出する場面だ。それをテレビの画面を通して見ている主人公が「もし、ほんの一瞬でも時間や場所が違っていれば、この人の死はなかったであろう。」と考えている。すぐに消えていく実感する今の時間の中に、違う時間や場所を組み込んだ思考が形を変えながら幾度も繰り返される。

〈日々の中にあることが、ばらばらに外れてきた〉という「わたし」によって ばらばらに記された日常が書き継がれる。私が居たという実在の括りにしなければ、時間と場所は私の手に負えるものではない。時間も場所も、もともと私の方から手を伸ばしてつかまえなければ、私に関係を生じることはない。

〈私が見なくても、この機械の中では戦争が続く〉という時間の二重性に嵌り込むテレビの録画機能。今を生きながら、過去をも生きている。

会社勤めは現実の生活というものの〈わたしがマウスとキーボードを操作して書類を作ると、コンテナは舟に乗ってその場所へ行く。実際に見たことも触ったこともない商品が、海を越えて、見たことも行ったこともない場所へ行く。〉という実感のなさ、余所事のようにテレビ画面で戦争を見ているのと何もかわることがない。

この空虚さは、戦争さえ非現実的な出来事に感じさせてしまう。

〈時間がたつにつれて、だんだん報道もされなくなる。戦争が続いているという状態にすっかり慣れてしまって、仕方が無かったことのように感じてしまう。〉という状態だ。

そう考えれば、〈偶然がそのどれかを選んでいた場合、わたしはいなかった。別の誰かが、わたしの代わりに存在していたかもしれない〉。それを、あからさまに見せつけるのが他者の死で行われる戦争だ。〈殺し殺されるのは、テレビの中のかれらであって、なぜ私ではないのか〉という問いが主人公に生まれる。

そこに時間の中に投げ出された苦悩があるはずだが、直接表現しない。

「わたしが いた街で」あるいは「わたしが いる街で」ではなく、「わたしが いなかった街で」という題名から、過去のみ語る(知る)ことができるという人間の特性を感じ取ることができるが、「わたしが あるとさえ知らなかった街で」であればどうだろう。過去とは言え、想像力は、知るという行為がなされるまで働かない。「知らない」ということは、存在を否定することさえできない。知らない街での戦争を知らない「わたし」だ。

遠い過去も、近い過去も、「もし……」とさえ感じられないことがひしめきあっている。だから、「わたしは今(私が知っていても、知らなくても過去の集積している今)ここ」を生きているとしか言えない。

想像力だけが飛躍できるのだが、自分は、なんと貧しい想像力だろうとあらためて思う。



何かがわかりそうでわからない、掴めそうで掴めない。そんな物語でした。

主人公、砂羽の時間は過去や現在を行き交い、場所も東京や大阪、海外と位置がころころと変わります。文章も一文が長めで、少し読みにくいです。しかし読書会で、物語が砂羽の脳内会議であることがわかりました。頭の中で漠然と考えている感じ、そのものが文章になっているのだと。だから時間も空間も行ったり来たり、越えたりして話が進む。それは、必然なのだと納得しました。

砂羽はTVで戦争のドキュメンタリーを淡々と見続けています。TVの向こう側、過去は生と死に満ちていて、その延長上の世界の片隅に、今、生きているはず。しかしその繋がりを感じられず、それ故に今自分が生きているのか、死んでいるのか、わからないでいるようにみえます。戦争が始まったその境目、恋人の暴力が始まったその境目、生きている実感とそうでない生のその境目、それはどこなのだろうか？そんなことを探っているように感じました。それを知れば、今生きている実感を掴むことができるはず。たまたま「今」を生きているわたしが、「今」を生きる覚悟ができる、と。(ちなみに、おもしろいのは二番目の話、『ここで、ここで』では、主人公は高い橋のてっぺんでいきなり恐怖で足が動かなくなります。境目がはっきりしているのです。ところが、そうなった途端に簡単に橋の柵を越え、飛び降りたくなってしまいます。生と死の境目がなくなっているのです。私たちが求める、その「境目」というものは、もともとないのではないか、とさらに考えさせられました)

「わたしは、かつて誰かが生きた場所を、生きていた」

当たり前のようなこの事実を、実感を伴って毎日生きていくのは意外に難しいように思います。

「日常を生きるとはどういうことか」。このことに関しても所々で書かれていて、興味深かったです。

何かがわかりそうでわからない、掴めそうで掴めない。

そのわからなさに、私は心惹かれます。著者は雑誌のインタビューで「分かりやすくすることで消えてしまうものも絶対ある」と述べていました。私もそう思います。分かりやすくすることに、重点を置きすぎてしまうと、形が変わってしまう。伝えたかった何かが消えてしまう気がします。何かある、それはもうちょっとで何かがあつとわかるはず…そのひっかかった感覚があると、一見さらりと読めた本でも、またじっくりと読みたくなります。するとまた違う世界がみえてきます。読書ってほんと不思議です。



◆ 8 月課題本 ◆

『職業は武装解除』

瀬谷 ルミ子/著 朝日新聞出版

台風一過の翌日の例会。幸い欠航がなくて、島からの参加者もあり、いつものように語り合うことができた。今回のテキストの内容は時事的な問題でもあるし、アフリカという地域が関心を呼んでいるようで関連する出版物の点数が多い。まず時間をとって、図書館が用意してくださった多くの参考図書をあれこれ手にした。

話をしてみると「武装解除」という言葉から思い浮かべることは、参加者の年代によって違った。1945年8月15日第2次世界大戦が終わり、負けた日本の軍人が各地で連合軍によって「武装解除」されたという認識が古い記憶の最初に来た。それには、天皇から預かった武器を相手に渡す屈辱感も含まれていただろう。しかし、それ以後の外国の紛争地帯での「武装解除」を想像する人が殆どだったから、それと「職業」とがどんな関係にあるのかに疑問がもたれた。

文中になじみのない略称が多くて、邦訳を読んで理解するには予想よりかなり時間がかかった。まずはメモ取りから始まった。

NGO: (英) Non-governmental Organization の頭文字を取った略称で、日本では「非政府組織」と訳されている。NGO には、途上国の貧困問題に取り組む国際協力 NGO や地球環境問題に取り組む環境 NGO、他にも平和協力や人権問題に関わる NGO など関わる問題ごとに役割が異なる。NGO アフリカ平和再建委員会など。

PKO: [英] United Nations peacekeeping operations 国連平和維持活動と平和プロセスや復興支援を進めるために 抵抗勢力に対する抑止力となる。

WANEP: 西アフリカ平和再建ネットワーク

DDR: 後に筆者の専門になった D武装解除 D動員解除 R社会復帰の略称

JCCP: 日本紛争予防センター

話題になった「武装解除」とは、筆者によると、紛争が終わったあと兵士たちから武器を回収して、これからは一般市民として生活していけるように職業訓練などを施し社会復帰させる仕事。紛争で壊れた社会を立て直す仕事、紛争後の平和構築、治安改善、と説明されている。たしかに、紛争終結後はどうするのかは大切な問題だ。そして、その活動に当たる専門家が非常に少ないという問題も提起されている。

「平和構築」ということの難しさは、紛争が目に見えようと見えまいと、個々の人間が抱える理想と現実の乖離を克服することであろうけれど、たとえ緊張状態にあろうとも、暴力を使わずに共存の道をさぐる努力ということを第一歩にするようだ。

そして「平和」という態度について、筆者は読者に問う。

「加害者が隣人として幸せに暮らしていることをゆるせるか？」と。実に深い問いで、色々な場面を想像すると、読み手の心が揺れる。

筆者は30才でJCCPの事務局長についた。彼女が大切にしているのは、想像力の活用ということだそうだ。将来を想像するのではなく、将来から「今」を想像するのだという。将来、今の自分の在り方を後悔したくないから、へとへとになっても「あと一歩だけ」進んでみるという考え方の持ち主だから、「今」そこでエネルギーを燃やすのだと思う。将来から「今」を想像するというのは、共鳴できる。「今」から将来を見たのでは、目先の欲という雲にとらわれるが、将来から見れば、今の目の前の暗雲も通り過ぎるものと見えるであろう。「今」、何を選択するかを考えると、この目の動かし方は大切だと思う。

志と手段とスキルを身のうちに養い、国際貢献(国際協力と言う人もあるが)の道を1冊の本にまとめて示している。それが他の誰かのためではなく、自分がこれから生きていく社会を自分が選びとっていきののだという意識が強烈に輝いている。

〈文句を言うだけではなく、自分が日本をどこまで変えられるか、やってみたら？ 紛争地の人にも、そうやって自分の人生を切り開くよう伝えてきた〉

彼女からのメッセージだ。

戦争のこと、教育のこと、安保関連法案のこと、自衛隊のこと、人生の転機となったこと、などたくさんの話を引き出してくれた本だった。



最初にこの題をみた時、戦争にかかわる仕事だとは思いましたが、よく読んでいくと、武器を回収するだけでなく、その後の生活の自立やケアもしていく社会活動だとわかりました。

作者の出会いや家族が困難の中でも立ちむかって、今できることをさがして、次の目標につないでいることがよくわかります。だめだと思っても、もう1つがんばってみるファイトに感心させられました。

今、収入がないために子供が兵士になったりすることが多いのですが、日本の活動にほこりをもてました。日本は敗戦からがんばって来て、中立の立場を保っていることを世界の人たちが高く評価しています。私たちには何ができるか考えさせられますが、この作者のように行動している方がおられることを知って、うれしく思いました。



紛争国や発展途上国で活躍している人の多くが若い時に何らかの影響を受けたり実際にその国を体験している。瀬谷さんも高3の時、ルワンダの写真を見てこの道を選んだという。語学力、その国の文化、民族、宗教等、いろいろな知識が要求される。身の危険もある。積極性も必要。たくさんの日本人が様々な国で汗を流している姿に感動する。安倍首相のゴリ押しの安保法案とは真逆の姿である。



世界の紛争地、和平合意が結ばれた地域で、兵士の武装解除(Disarmament)、動員解除(Demobilization)、社会復帰(Reintegration)＝DDRを職業として活躍する瀬谷ルミ子氏。シエラレオネ、アフガニスタン、ソマリア、ケニア、南スーダン、バルカン地域…。彼女は言う。

「日本のもつ中立性と大戦後の復興の経験が、世界各地の紛争地に大きな影響を与えている」。「戦後日本が復興した姿をみて、今はボロボロの自分達の国も、日本のようになれるのではないかという希望を与える存在である」と。「日本人の多くは、それを知らない。そして、世界で一定の地位を築いた今、道を失い、自信を失っている」。

『「日本が言うから、信頼して武器を差し出すんだ。アフガニスタンの民を無差別に空爆しているアメリカやイギリスに言われたら、撃ち殺してやる」』。「バルカン地域の内線に関与していない日本は和解という微妙な問題にも、中立的な立場で関わってくれと地元民から信頼

されていることをよく感じる」。「ソマリアでは、アフリカで植民地支配をしたことがなく、支援を行う際にも政治的な思惑をつきつけない日本は、中立的な印象をもたれている」。

戦わない。あなたを暴力で傷つけない。共に生きていくために、考え、話し合い、また考えていこう。共存の道を必ず見つけられるはずだから。

こんな考え方は、きれい事かもしれない。でも今の私たちには、将来に掲げる理想を必要としていると思う。世界の中の日本人として生きていくために。

この夏、集団的自衛権が無理矢理決められそうな中で、日本の平和とは何か、この先、日本の進むべき道とは、と自分の頭で考えたいと思って過ごしてきた。今回この本を読んで、「日本の平和を守ること、9条を守することは、世界の平和につながっている」ということに気付くことができた。日本の平和は、日本人だけが享受するものではない。あの悲惨な戦争を二度と繰り返したくない、子供たちを戦場に送りたくない…そんな強い思いも大切だ。しかし、その平和を守ること、他の国と武力をもって戦わないということが、世界で大きな信頼を得、そのかけがえのない信頼こそが、世界の紛争を解決する鍵となり、さらに紛争再発予防となる「平和構築」を作るのである。これこそが積極的平和主義なのではないだろうか。

この読書会の日(8月26日)、朝日新聞には“「積極的平和」の真意”との題で ヨハン・ガルトゥング氏(ノルウェーの平和学者)の記事が載っていた。まるでその日の読書会、課題本にリンクするような記事で驚いた。ガルトゥング氏は平和貢献のために具体的に何が必要かと問われて、「国際紛争を解決する手段として武力を放棄した憲法9条1項を堅持すると、国連総会で表明すること」とこたえている。これこそ、これからの日本の武器になると思う。



◆ 9月課題本 ◆
『李陵・山月記』
中島 敦/著 文芸春秋

竹原での読書会は、通常毎月1冊を課題図書にしている。1冊ずつ読み切りの形で重ねていくわけではあるが、読み終わったらそれでおしまいということにはならない。“後を引く”のだ。

先月の課題図書『職業は武装解除』で身近になった著者の瀬谷るみ子氏は、安保関連法案に関する報道の中でたびたび意見を述べられるから、これまでより報道全体が光を帯

びる。日本が国際協力できる道は「お金」「武力」以外にあるのだと、著書と同じ主張をされる。

先々月の課題図書『私のいなかった街で』(作 柴崎友香)は、時系列乱舞の表現方法に読み手もきりきり舞いさせられたが、それが既知感となり、他の似たような表現方法の作品(例えば、『ヤマネコ・ドーム』(作 津島佑子))に出会っても落ち着いて読み進められた。

今月の課題図書『李陵』は、作者の中国古典への知識から、漢字の多い作品になっているが、5月の課題図書『光圀伝』(作 沖方 丁)が理解の下地になった。その時に図書館から出してもらった参考図書が、“後を引いて”大いに役に立った。

作品の題が『李陵』となっているので、中心人物は「李陵」かもしれないが、読書会参加というのは、作者の中心とは違う中心をもって語る人も多い。今回は、「李陵」「司馬遷」「蘇武」の3人に加えて、匈奴の「単于」も話題になった。

司馬遷は、李陵を擁護したために武帝の怒りを買って、宮刑という辱めを受けたが、それでもなお、なんとしても歴史を書き残したいという執念に、生きながらえる意味を求めた。徳川光圀は、その司馬遷の意味を認め、自らが率先して編集した『大日本史』という歴史書を『史記』にならって「編年体」ではなく「紀伝体」で編纂した。〈史書は、生きた人間の記述であり、今生の世を未来に献ぐ〉のだと光圀の意思を、沖方丁は述べている。

宮刑を受けた司馬遷の煩悶と矜持は、この『李陵』だけではなく、武田泰淳の作品『司馬遷』も生んでいる。第2次大戦を経験するこの二人の作家に、司馬遷を語る口調を熱くしたものが共通してあるだろう。

騎馬を得意とする匈奴を追って北征する李陵の軍は、歩兵ばかりの5000人。ゴビ砂漠に行ってみると、砂礫の起伏が延々と続く以外何物もない。現在は砂礫の中を車道が通っているが、実に荒涼とした景色だ。強い馬を乗り回し戦いを挑む匈奴に敗れた李陵は、匈奴の客として遇される。故国では裏切り者とされ、親族縁者は全て殺された。それを知っても匈奴と共に移動するしかない李陵の心中を、李陵になりかわった作者が漢朝廷への憤怒を語り、武将としての己の動揺を語る。

殊に印象的だったのは、漢文化から見れば禽獣に近いと見なされる匈奴の暮らし向きを、風土の特性に従ったものであり様々な様式も漢文化が偏見を持って見ているに過ぎないではないかと書き記していることだ。後年、モンゴルのフビライ・ハンが修復したと伝えられ今に残る司馬遷の墓の形がパオに近いのも、こうした匈奴の文化の擁護をしたことの結果だろうと言われている。

小説の題材に、「葛藤」は主流となることが多いが、この作品も李陵に対して蘇武という真反対に見える武将を配した。考える事がきらいという李陵でも、漢と匈奴の狭間に立ち、漢の武人でありながら胡服を着る自分の苦しみを如何ともし難かったが、そこへ、蘇武という硬骨漢の友人との出会いがもたらされる。蘇武は19年間、節を曲げず匈奴に降伏しなかった。バイカル湖のほとりで惨憺たる生活をしながら、自ら死ぬこともせず、匈奴に事えることもせ

ず、ただ漢への忠誠心だけで生きている。何のために蘇武は生きているのかを考えると、李陵は、彼の前で密かに冷や汗の出る思いをするのだ。

「やむをえなかった」を許さぬ男、蘇武。

「やむをえなかった」と言いたい李陵。

李陵の心は、蘇武を思い浮かべるごとに、暗い懷疑に落ち込んでいく。

例会では、それぞれの思いを語っていくと、この李陵と同じような心情を持つ自分をかえりみて、李陵に近親感を持つという人も多かった。

先日見た古い映画(「連合艦隊」昭和56年 東宝制作)の中で「三国同盟を承認したとき、〈やむを得ない〉と大戦が始まり、ポツダム宣言を受諾したとき〈やむを得ない〉と戦争が終わった」というセリフが耳についた。

李陵と蘇武の「やむをえなかった」場面は、いつの時代でもある。そして誰の心の中にも二人が居て葛藤を味わう。

昨日、安保関連法案が参議院で可決された。

「やむをえなかった」と銃の引き金を引く事態は、避けられるだろうか。引き金を引くのは法律ではなく、一人の生身の人間なのだ。



人間の強さ、弱さ、傲慢、嫉妬、弁解等、主人公李微を介して、彼の人生の破滅を見つめる。すべての面で周りより格上と見なし、殊に詩作の才能を信じ、これで生きようとするが失敗。臆病な自尊心と尊大な羞恥心が膨らみ、この性情が彼にとって猛獣の虎となった。

虎の姿になりつつも詩への執着は消えず、友に詩を筆記して貰い、別れの即興詩を託して姿を隠してしまう。何故自分の弱さを見つめ、人との交わり、つましさを拒んだのか…

李微の人間性、時代背景もあるが、なかなか一筋縄では説明の出来ない人間が見える。



李陵、司馬遷、蘇武という主に3人の登場人物が、その生き方を示しています。読んでいて、李陵はどう生きたいのか、一番わかりませんでした。史記を書き上げるという使命がある司馬遷は、生き恥をさらすような境遇になっても死ねません。匈奴での苦難の生活に耐え得ずして自ら殺すことは単宇に負けることになると思う蘇武も、死ぬことはできません。では李陵は？ああでもないこうでもないと、いろいろ思い悩み、恨み、情にほだされながら、苦悩の日々を過ごしています。漢に戻りたいわけでもない、匈奴にいたいわけでもない、所在ない日々。どうにもならない憎しみと悲しみを抱えながら、どこに向かうこともできず、生きる目的も曖昧になったまま、生き続けている。

さしせまって死ぬ理由がないから。そんな李陵を、私は一番好ましく思いました。目的を持ち、突き進んでいる司馬遷や蘇武のように、私はなれそうにないからです。李陵の弱さに、心惹かれました。ところが読書会では「李陵は賢い。したたかに生きている」という意見も出ました。

状況の変化に合わせて、生きるための選択を上手にしている、と。司馬遷や蘇武は視界が狭く、1つのことしか見られない、と。確かにそうかも！と思いました。そして敵を受け入れる、単宇の懐の深さに注目が集まりました。また李陵は匈奴の風習にも理解を示し、受け入れます。寛大な単宇に命を救われ、受け入れてもらったことで、李陵にも広い視野を持つことが出来たのではないかと気づきました。また1つ、自分で読んだだけでは味わえない、読書会の醍醐味を味わったひとときでした。



◆ 10月課題 ◆

大人の調べ学習！ ～ローマ帝国って何だっけ？～

次回の11月テキスト『新ローマ帝国衰亡史』を読む前に

ちょっと事前に 大人の“調べ学習”

竹原読書会で毎月のテキストに使う本は、便利が良いから殆ど県立図書館の読書会用セットの中から借りることにしている。セットは、毎年買い足されるから少しずつ増え、どの本にしようかと頭を悩ませるが、「新着」の印が付いているとつい組み込むことが多い。

その中で目にとまったのが『新ローマ帝国衰亡史』(岩波新書)である。新聞書評欄で見たことがあるから、かなりの読者を持つ本だろうとは思ったが、それにしても、読書会用セットに採用されていることには興味がわいた。

そうだ！11月は、竹原読書会でも読んでみよう！

西洋史に特化した読書会ならともかく、日常の暮らしの中での読書会では、「ローマ帝国」の文字が躍るということはそうあることではない。そもそも「ローマ帝国って、どんな国だっけ？」と言う方が先だろう。学校で覚えた西洋史は、歳月には勝てず、おぼろで、まだらで、かすんで、消えかかっている。

そこで、前の月の10月は、子ども達が学校でやっている「調べ学習」にならって調べっこをし、各自の知識を眠りから(?)覚まそうということにした。修学旅行に行く生徒が、よくやっている事前学習である。

テーマ建ての心積もりは8月頃から始まった。

10月の例会は、BC753年からAD476年を「ローマ帝国」としてとらえ、この1200年にわたる「ローマ帝国」の盛衰を、参加者がそれぞれ自分の興味に合わせたテーマをたてて語り合った。

「通史」「最盛期」「人物」「政治」「文化」「食」「建築」「思想」「教育」などを、一応の括りとしてそれぞれに語ったのだが、もちろん重なる展開も多い。だから、話が自分のテーマに関連した事項にさしかかると、その展開を引き受けてその人が語り、また次の人が発展させ、元の人が続きを語るという具合で休憩する暇も無いほど実に濃密な2時間半になった。

それぞれが持ち込んだ資料は図書館でコピーしてもらい、図書館提供の資料本の多さも並の冊数ではなかった。

大人の“調べ学習”が楽しかったかどうかは、参加者それぞれの胸の内のことだが、次のテキスト『新ローマ帝国衰亡史』が、遠い過去の歴史ではなく、現代の私達に通じるものであろうという予想は、皆の口調に共通していた。

せっかく調べたのだから、話す時間の足りなかった分も少しまとめて、来年度初めに出す感想文集『竹の音』に掲載しようということになった。これから3月まで、「ローマ帝国」を背にかついで楽しい(?)時間が続く。



初参加でしたが、ローマ帝国の歴史が今も私達の生活の中にヒントがあり、ローマ時代から続く女性の生き方のヒントが大変勉強になりました。



読書会なのに本は読まないで11月の課題図書「新・ローマ帝国衰亡史」の為の予備知識を得るためにローマ帝国についてメンバーがそれぞれの分野で調べました。私のパートは「ローマ文化」でした。

久しぶりに学問(?)をしました。とても新鮮でした。

あまりに膨大でどう料理してよいのか迷いました。簡潔に！

◎ギリシア文化(ヘレニズム文化)の模倣に終わった。

・十二表法(成文法)の制定

今では慣習的法律

・ユリウス暦(カサエルが制定)

現在のグレゴリオ暦のもとになる

・ローマ字＝ラテン文字

ギリシア文字をもとにして自分たちの言葉(ラテン語)を書き表すのに 使用

・学問・芸術もギリシアヘレニズムの真似

・哲学者としてセネカ有名(ネロ帝の先生)

・エピクテトスは奴隷出身

・カサエル(皇帝)がガリア戦記を書く

◎古代ローマの公衆浴場の文化的重要性

・現代の図書館・美術館・ショッピングモール・バーレストラン・ジム・温泉が複合された施設



「古代ローマ帝国とは？」

壮大なスケールのローマ帝国を、教育・文化・建築物等々、様々なジャンルから見てみようという今回の読書会。好きなものを一つ選んでみんなで発表。私はその最盛期頃を選択、西洋古代最大の帝国を築き上げた凄まじい人々の活躍、前七世紀頃にイタリア半島のテベレ河口に建てた小さな都市国家に始まり幾つもの政治形態を経て後一世紀後半から二世紀にかけての所謂五賢帝時代が最盛期となる。12代のネルバ、トラヤヌス、ハドリアヌス、アントニヌム・ピウス、マクルス・アウレリウスの16代にかけて最大の版図は東アジア、西はポルトガル、南はアフリカ、地中海沿岸、北はイギリスに及んだ。たくさんの国を吸収していく過程で領土そのものだけでなく、その国の文化・技術・美術・軍事・土木・法制等を上手に取り入れて繁栄していく。

殊に建造物の技術は現代に通ずる高度なものである。

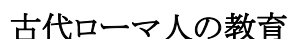
盛えるものは必ず衰退の道を辿ることになるが、ローマ帝国もやがて東西に分裂、西ヨーロッパ帝国は五世紀後半ゲルマン人によって滅ぼされフランク族によって東ローマ帝国へと継承される。

シーザーが、フォロ・ロマーノの元老院クーリアで拳を振りあげて演説している姿が浮かぶ。

次回の課題図書「新・ローマ帝国衰亡史」が読めるやら、楽しみやら、怖いやら

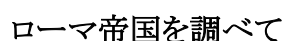
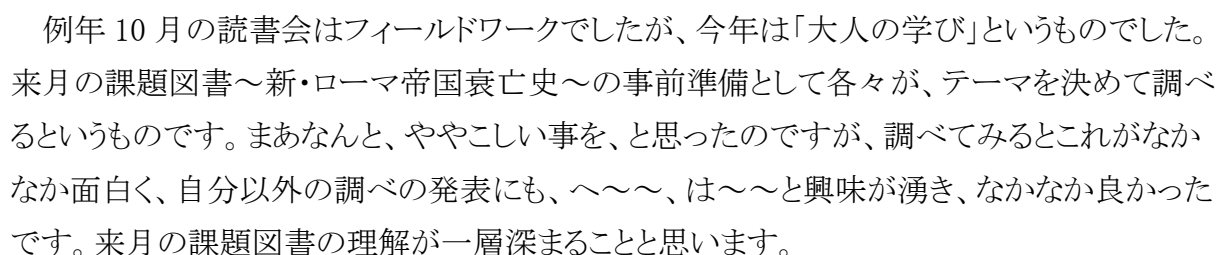


私が調べた中で、おもしろいと思った事は、「パンとサーカス」 貧しい人々に食糧(パン)と娯楽(サーカス)を無償で与え、反乱を防いだといわれている事です。

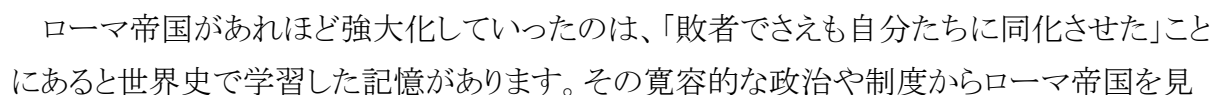


まとめることには苦勞したが、歴史の勉強にとどまらず、現在の世界状況と重ね合わせて考えさせられることが多く、意義深い機会と思った。

戦っても敗者をしいたげるのではなく、他の民族と共に生きていこうとする寛容さ、同化する親和力に、今の社会が学ぶべき姿勢を見せられた気がした。



建築の知恵は、現代の想像をはるかにしのいでいる。国家とは何か考えさせられます。でも自分の心を律する知恵は今も昔も変わらない気もする。



てみようと思いましたが、大きすぎるテーマでした。調べているといろいろな方面にひろがりあれもこれも知りたいと思う様になりました。(課題本を読む意欲はわいてきました。)

ローマ帝国の皇帝の地位が大変不安定でローマ帝国とほぼ重なる中国の漢と比べてみるとローマ帝国は、実に77人の皇帝で漢は28人の皇帝で治められています。もともと強大な国であったのではなく、イタリア半島の小国からあのように強大化し衰亡していった原因の一つに、政治や制度上の出来事が原因の一つであることは否めないと思います。皇帝の性格や出身地などもその政治的手腕に影響を与えていることや、出生の事実ももしかすると影響しているのかと思わせる報告を聞きました。教育制度や市民権のことなど制度の細かい所も知ることが出来て、いつもの読書会とは違う楽しさがありました。

そして「全ての道はローマに続き」まさに「ローマは一日にしてならず」を実感しました。



私は古代ローマの宗教について調べました。最初は通史も全然わからず、ローマ皇帝の名前も頭に入ってこなくて、ちゃんと調べられるか心配になりました。しかし関連する本を探したり読んだりしているうちに、古代ローマと今の社会が繋がっている、今の社会をより良くするヒントがたくさんあると気づかされ、だんだんと楽しくなってきました。ローマ人の宗教観の特徴は寛容とコスモポリタニズム(世界市民主義)ですが、ローマが大きくなるにつれて人々の考え方が変化していきます。その経過が通史を通して、少しずつわかっていく過程はとても興味深かったです。著者によって歴史の見方、考え方が違うので、どう読みとるか悩むことも多かったのですが、いろいろな本を調べ、読み、バラバラになって入れた知識がつながりはじめ、何かがわかった、何かをつかんだというこの感覚一何だか久しぶりの楽しさでした。まとめるのはかなり頭を悩ませましたが…やってよかったです。巨大化したローマが衰退していく過程に興味が湧きました。次回の課題本、『新・ローマ帝国衰亡史』を読むのが楽しみになりました。



◆ 11月課題本 ◆

『新・ローマ帝国衰亡史』

南川 高志／著 岩波書店

『新ローマ帝国衰亡記』

栄えた者は必ず滅ぶ。これは、時をかければどこにでも当てはまるに違いない。そう思いながら読んでいたら、著者の後書きの1行目が〈繁栄を極めた国はいずれ衰える〉と始まっていた。それだけの感慨で括れば『平家物語』も同じ色だ。“諸行無常の響きあり、……盛者必衰の理をあらわす”に通じる。しかし「諸行無常」というのは、変わらずに在り続けるものは無いという思想であって、衰えて行くことだけを無常というわけではない。「衰亡」というのは、ローマ帝国側から見ればということで、今日のヨーロッパから見れば、別の扉が開かれる過程だと言えなくもないのではないか。ローマ帝国という大樹が衰亡し、その大樹の崩壊要因を内包した多くの若木が新しい民族の樹として根を伸ばし枝を張っていったということでもある。ローマ帝国崩壊後も、どれほどの民族や国家が互いに競い合うように新生し崩壊し新生し崩壊し、と繰り返しながら続いていることか。

宗教の対立や経済格差で危なっかしい繁栄に見える現在のヨーロッパ情勢だが、これは新しい扉に向かう「隆盛」の途上なのか「衰亡」の途上なのか。あちこちで紛争を起こしながら、ある人々には善に見え、ある人々には悪に見える扉を作りつつある。

“ローマ帝国では、人間のする事は全て一通りして見せてくれている。”とは、読書会で語られたセリフだ。国家の興亡もさることながら、2000年経って人間の何がどう変わったのか、変わらないのは何なのか、それも示してくれる本だ。

今年の読書会は、歴史にかかわるテキストが印象に残る組み立てになった。その中でも、歴史を著述するのに、編年体よりも紀伝体にする選択が目立った。

『新ローマ帝国衰亡史』を、研究者でもない者が読むのだが、人物を追っていく書き方が読み続けさせてくれた。これを勝手に、紀伝体(?)系のおもしろさに分類した。人間を描くと喜怒哀楽の深い陰影が加わり、事態の起伏が立体的に迫ってくる。

歴史書は、何を根拠にそう言うのかが問題になるが、ローマ帝国に関しては研究書も多いが不明な点も多く、諸説入り乱れているようだ。だから「新」の文字をつけて、他の説も挙げながら著者の説が述べられている。

「ローマ帝国」の概要については、前月の「大人の調べ学習」で、それぞれのテーマで詳しく語って貰った。その前知識に浸りながら読み進めっていると、コンスタンティヌス大帝が登場

するや、俄然、著者の口調がなめらかに高揚する。さあ、ここからが、「衰亡史だぞ」という具合に。

時の流れがかなりのスピードで書かれているので、前の調べ学習の知識がしっかりと足下を固めてくれる。

衰亡に向かっている、万事窮すと投げ出されていたわけではない。治世者は策を練り改革を志した。コンスタンティヌス大帝も、その死後を勝ち残ったコンスタンティウスⅡ世も、後継者ではあったがコンスタンティウスⅡ世に反抗した皇帝ユリアヌスも、その後帝国を統べる皇帝になったテオドシウスも、それぞれに難題を抱えながら奮闘している。そのそれぞれの皇帝の人柄を描きながら、時代の推移を書き連ねていき、抱え込んだ難題の背景や理由を知らされる。

この人物達の紹介が生き生きしている。親子の疑心暗鬼はもちろん、兄弟や従兄弟の駆け引き、娘で結ぶ政治的親密さ、裏切りなど、小説の材料になりそうな人間関係がうんざりするほど出てくる。それらはローマ帝国特有の人間関係ではなく、どの国でも、どの王朝でも類型を沢山見ることが出来る。人間というのは性懲りもなくこれを繰り返す。もちろん 1600 年経った今でも、このDNAから逃れられる人はないだろう。抑制する能力をいかに身につけるかが哲学や宗教の問題になり、抑制を助ける環境を作る思想や実業が欠かせないのではないか。

次々に登場する民族の位置や名前を追うのは大変だった。しかし、それら周辺の民族侵入が帝国崩壊の大きな要素になっていたことは一般に認められている。「寛容」によって成り立っていた広大な領土を持つ帝国が、次第にシステムを分断され、不寛容になって崩れていく様がローマ帝国の衰亡史なのだ。

ローマは、「ローマ人である」というアイデンティティで統合されていたのだと著者は述べる。具体的な生活の内実を伴っていたが、領土的にも、人種的にも、「ローマ人である」というアイデンティティだけで帝国は保たれたのだ。この「寛容な」理念が、次第に不寛容で排他的な思想に変質したようだ。

ヨーロッパにおしよせる難民や、パリでの同時テロが起きたこの時期、新聞紙上で「欧州の寛容や平等の理念の矛盾を突き、憎悪をあおるテロ…」とか「開かれた自由な欧州とテロ対策の両立が難しい」とかの文字を見る。

現在の主流をなす価値観から言えば、欧州は自由で寛容なのかもしれないが、違う価値観を持つ人々も隣り合わせで生きている。銃の引き金を引くそれぞれの「正義」があふれていて単純ではない。2000 年後の人々は、今の時代をどんな言葉で歴史書に仕立てるであろうか。

読書会は、「私という染まりやすいアイデンティティ」を会話の口火にして、TPP議論も挟みながら、現在とそれに続く未来について語り合う場になった。



『新・ローマ帝国衰亡史』を読んで

前回の読書会でローマについて勉強していなかったら、私はこの本を読んでも字面ばかりを追うだけの読書になっていたと思います。少しずつ、皇帝のことや通史がわかってきていたので、拒絶反応が強くでることなく、読みすすめました。それでも本半ばの皇帝たちの支配権をめぐる身内のごたごたにはついていけず、うんざりしてしまいましたが・・。

ローマ帝国は周囲の集団を受け容れることによって力を持ち、大きくなっていった国家です。その精神は寛容さであり、ローマ国家の約束事(法)に従い、その伝統と習慣を尊敬するものなら、誰であろうと「ローマ人」になれました。南川氏はいいます。『ローマ人』であるというアイデンティティは、出身部族や居住地、あるいは宗教などを理由として誰かを『排除』するものではなく、むしろ多様な人々を『統合する』イデオロギーとなっていた」と。しかし、「4世紀後半、諸部族の移動や攻勢の前に『ローマ人』のアイデンティティは危機に瀕し、ついに変質」してしまいます。外国人嫌いをともなう、排斥の思想。「国家の『統合』ではなく、『差別』と『排除』のイデオロギー」＝「排他的ローマ主義」と変わってしまいます。そしてローマ帝国は「外敵によって倒されたのではなく、自壊した」というのです。それは「激動の時代に生きた人々の自己理解、他者認識が変化して、国家の本質が失われていったから」。ローマ帝国の衰亡とは「『ローマ人である』という、帝国を成り立たせていた担い手のアイデンティティが変化し、国家の本質が失われていく過程」であったと。ローマを形つくっていたコアが、自分がローマ人であるというアイデンティティに拠っていたという考え方は、とても興味深いです。そして人々が寛容さを失い、排他的になった時、国は自滅する一私はそんな風に読めました。そこに住む一人一人の意識が、その国を成り立たせているのだと。最近の私は、結局、権力をもっている人が国を好きなように導いていってしまうのだと、何も自分達の望むようにはなっていないのだと、あきらめの気持ちが強くなっていましたが、そうでもないかと思えました。

読み進んでいると、これはまるで今の日本のこと?などど、世界のいろいろな国の名前が浮かんできます。前回調べていても思いましたが、ローマが遠い昔の話に思えません。排他的な傾向は今の日本にも当てはまります。経済活動の停滞、貧富の差、税金の増加…結局私たちは同じようなことを繰り返して生きていくしかできないのかと、残念な気持ちにもなりました。しかし読書会で先生が「西ローマの滅亡も諸行無常のなかにある」とおっしゃっていました。ローマから見たら滅亡でも、そこに生きる人にとっては新しい国が始まったということでもある。終わりがあれば始まりがある。物事は移り変わっていく…。見方を変えれば、私たちは未来を絶望することはないのだらうとも思えました。



何と次々カタカナの皇帝の名前が続き、なかなか読み進みませんでした。しかし前回の読書会での調べがありましたので、概要は何となく理解できました。あのローマ帝国が崩壊した

のはなぜか、ローマ人であるという同一性を他者にも与え、仲間としていた時代には、国も栄えたのだが、この寛容性が失われ、他者として差別した頃から徐々に崩壊していったのではないか。国が豊かな時は寛容性を発揮できるが、経済が苦しくなるとそうはいかなくなる。とまあ、こんなことが書かれているような…。今現代のいろいろな出来事と重なり合うような、自国の利益の為に労働力が必要な時には移民を受け入れるが、必要でなくなると差別、排除したくなる。行き場のなくなった人たちはどうするのか…。読書会当日までに読み終えることが出来ませんでしたので、また改めてゆっくり読んでみたいと思います。



霜月末の20日余り5日の読書会は『新・ローマ帝国衰亡史』でした。先月この作品に対する予備知識として、会員が分担して調べ学習をしました。

人様の発表を聴くのはルンルンでした。今月は一変して苦痛でした。学者さんの書いた本。理解が伴わないのです。活字だけがすべっていくのでした。(私には……)義務(?)なので読みましたが、残念にも感想を書くには至りませんでした。

今月の読書会に参加して感動したことがありましたので、これを書く事にしました。人名とか年代が膨大に出てくるので、それを一覧にして参考にして読み進めた方がいらっしやいました。どんなに時間を費やしたのかと思うと頭が下がりました。

読書に対する姿勢のひとつだと学びました。

追伸

歴史に興味がある方にはオススメです。



新・ローマ帝国衰亡史より

帝国も個人も全ては人の日々。生活の中から出発する。喜びと不安が同時にスタートされるが、自分の都合の良い方を取るのが人間らしい。

国、個人の統治の正論は色々あるけれど、各々人がそれぞれ作り、その調整の為、口論が戦争、殺人まで発展し、衰亡するのではないかと考えました。言えない人は病気になり思いさえも衰亡。これも全ては私が私でありたいと願う自己確立の進化と変化と共に、変わりゆく過程の上の必然なのかも？

宇宙の始まりの原子の集合体のゆらぎの中で、私達の心も、どちらへも振られる存在であること、宇宙が地球を作り、月は地球と衝突しながら、地球物質を内包しながら、違う天体に移動と翻弄を重ね今がある。

それが宇宙の仕組みなら逃れる事はできない。調整の為の異議をし、己の自己統治と自己確立が必要。自分が最小の原子に戻るまで。

終わりは喜びで結びたい。

次回のテーマに秘策を見つけるために希望あり。



新 ローマ帝国衰亡史を読んで

前回の調べ学習から、ローマ帝国は、侵略した地域にも、それぞれの多様性を認め、市民権を与えるなど寛大な思想によってローマを 1000 年以上も存続させることとなったことを知って、お手本にしたいと思ったが、ではなぜ滅亡していったのか、とても興味をもって読み始めた。

しかし、次々出てくるカタカナばかりの名前、地名に、途中で何度も投げ出しそうになりながら、なんとか終わりまで行き着いたというありさまだった。

結局、さまざまな原因が積み重なって、寛容な思想が消えうせ排他的で保守的なローマ主義がでてきたことも、衰退の原因の一つと理解した。人口増大による食料不足等、ローマ帝国の富が不足してきて、多くの人々を養えなくなって、寛容ではいられなくなったこともあるようだ。人は、豊かであれば寛容でいられるが、自分の身が脅かされるとなると保守的になってしまうという言葉は、胸に刺さった。まさに、今の難民流入問題、人道的になんとかしなくてはと思うものの自分達に影響が及ぶと思うと、はたして寛容でいられるかどうか。

ローマ帝国から学ぶことは今の社会を考える上でとても意義深かった。



◆ 12月課題本 ◆

『アンのゆりかご』 ～村岡花子の生涯～ 村岡 恵理／著 マガジンハウス

今回のテキストは、NHK朝の連続テレビ小説「花子とアン」(平成 26 年前期)の原案になった作品として知られている。1893年(明治26年)に生まれた村岡花子が1968年(昭和43年)にその生涯を閉じるまでの出来事が、義理の孫である村岡恵理によって記されている。因みに、村岡花子の“腹心の友”柳原白蓮は1885年～1967年の生涯であった。

ところが、読んでいくと、もう一つ、今放映されているNHK朝の連続テレビ小説「あさがきた」の登場人物のモデルがいた。時代が重なるからだと言えばそうなのだが、「あさがきた」のヒロイン白岡浅子は、実在の広岡浅子(1849年～1919年)をモデルにしている。晩年

の浅子が主宰した合宿勉強会には市川房枝などと共に村岡花子も参加している。今後、「あさがきた」では、今回のテキストに記された女性達が「浅子」の周りで活躍することだろう。

テレビ小説はおくとして、今回の作品を読んでみると、村岡花子という人物がどのような時代を生き、どれほど多くの才ある女性に感化を受けたか、辺り一面輝くばかりだ。もちろん、時代は、日本が第2次世界大戦に突入していった時期を挟むから、すべての人が苦しんだのだが。

花子のバックボーンたる東洋英和女学校はキリスト教系の学校ではあるが、軍国主義を受け入れざるを得ず、世間に迎合しながら生き残る道を選んでいる。しかし、村岡花子を終生つらぬいたのは、カナダ人キリスト教宣教師からの薫陶であった。「大人も子どもも楽しめる」という村岡花子のユートピアを表したのが、彼女が翻訳や創作をしたたくさんの本であったし、その頂点とも言うべき作品が『赤毛のアン』だった。東洋英和で教育された英語力が活かされ、モンゴメリー作『アン・オブ・グリーン・ケイブルス』の翻訳が『赤毛のアン』として登場したのである。

このテキストの作者は孫としての見地から、「キリスト教、英語、文学、社会改革の意識」が花子の人生をある程度決定付けたと記す。7才の息子を病気で失った花子が「我が子」という対象を肉眼の前にもたないで我が子を愛する今、愛は醇化していきます。」と語る。現実に居た息子への思いを、日本中の子ども達へ上質な家庭小説を翻訳して渡そうという決心として結実するのには、なまやさしい苦悩では済まなかったであろう。

〈一度点じられた火は消えません。一度燃やされた貴い母性の火を高く高くかかげて、世に在る人の子達のために道を照らすことこそ私の願いです。〉

まさに、その願いに導かれて過ごした生涯であったと言えるだろう。しかし、その陰に、きょうだいの中でただ一人教育を受ける機会をもらうような時代だったことや、同時代、世に出ることの出来なかった才ある女性達が居たことも思い起こされる。



『赤毛のアン』は時々読み返す、大切な本。読むといつも元気をもらえる。生きることは素晴らしいと、すんなり思わせてくれる。

こんなに楽しい『赤毛のアン』の本が、実は戦時中に翻訳されていたことに驚いた。「平和の時を待っているのではなく、今、これが私のすべきことなのだ」という、村岡花子氏の強い思い、覚悟があつてのものだったということも。

戦後は「戦時中よりも食糧難が深刻化し、何よりも食べるのが第一という状況の中でも、人々は夢を求め、本を求めていた」という。本を読むことで希望が生まれた時代。それは今も同じだろう。

今回の読書会では「チャンスを掴むにはチャンスを増やすこと」という話が出た。チャンスはみんなにあるけれど、それをつかみ取るためには、どうしたらいいのか。少ないチャンスで

は逃してしまう。でも選択肢が多ければ、掴む確率は高くなる。では選択肢を増やすためにはどうしたらいいのか。自分の世界を広げておくこと。豊かにしておくこと。そうすれば、いくつもの道が見えてくるはず。「これしかない」と思う時は、危険。なぜなら、一本しか道が見えていないから。それしかないことなんてない。道はいくつもある。私が見えていないだけ。

いくつもの道を見つけること、増やしていくこと。自分の世界を豊かにし、広げておくこと。そのために、本がある。本を読むとは、そういうこと。今、私のすべきことは何か。多忙を言い訳にせず、今読みたい本を、今、読もう。読みたい本を、今読める贅沢を、その幸せを、今、楽しみたい。



孫の村岡恵理さんの著作です

某テレビ局の朝ドラとか言うもの。確か「花子とアン」でしたか？それをご覧になられた方はエッ？違うと思われる所が沢山あると思います。

あの時代あんなに条件の悪い中でよくぞよくぞ翻訳にかけては第一人者と言われる程になった事。本人の努力もさることながら、周囲が花子さんにとっては「ゆりがご」のようだった事も幸いしていたと思います。女性の内に秘めたものが噴き出して日本の女性の生き方を変えた人々が時を前後しながらも集まってきたのです。

彼女の生き方の根底に流れていたものはキリスト教の教えだった様にも思われます。

資料や写真も豊富に入っていますのでとても読みやすい本です。是非手に取ってみて下さい。



女性を解放するために、沢山の人が努力し作られた歴史の中に、村岡花子さんの生涯があり。人、ひとりが生きた足跡を感じ、生きることのすごさを感じました。

人生の上、下 up、down の波を越える術もうまいかないか？

一生懸命やってたら、後は感じる良し、悪し。

これは私の感じ方でいいのね。



ミッションスクールの様子がドラマで描かれていましたが、この本ではさらに詳しくかかれています。アメリカのキリスト教の精神はみんな平等。広い心を生活のすべての面で示すよう教育プログラムを形成してある。学問の知識だけではない、大きな価値や愛を感じる。

先生たちは花子にアンの小説を託して、アメリカに帰っていく。花子は空襲の中、アンの小説を焼かれないようにする。自分に託されたものを大切にひきついでいく。

日本の女の社会的立場の向上のため、会をつくって活動していくねばり強さに感心させられました。

国に関係なく、心の広い、分け合う人たちの存在に感激しました。



◆ 1 月課題本 ◆

『さきちゃんたちの夜』

よしもと ばなな／著 新潮社

6人の「さきちゃん」の5つの物語。

早紀ちゃん。紗季ちゃん。咲ちゃん。沙季ちゃん。崎ちゃん、と、そして崎ちゃんの姪のさきちゃん。

どの話も、さきちゃんと呼ばれる「私」が語る。

中に「さきちゃんたちの夜」という1編もあるが、表題作という感じがあるにしても、それだけではないともいえるのではないかな。

短編は、分量が少ない。だが、その少ない分量で心地よく終わらせてくれるものもあれば、少ない故に、読み手が焦らされてあれもこれも継ぎ足したい思いに駆られる編もある。

どの編が、それに当てはまるかは、併読している本にもよるし、持ち時間の違いにもよる。だから読書会で短編集を読むときは、その人その人によって「これが良かった」と挙げられる編の違いが出てくる。今回の5編について、気になったり共感をもったりしたのはどの編かを一人1つずつあげていったところ、見事に全編に該当者があった。重なった作品もあったわけだが、それぞれにその思いを語るのも読書会の醍醐味と言える。

「夜」というイメージについても話題になった。夢。想像。不思議。裏側。闇。孤独などである。作品では、夜は〈暗く沈む〉と書かれているのだが、朝の来ない夜はない。苦悩の中にあってもいずれ解決するときに来ると励ましの言葉として耳にすることが多い。あとがきに〈き

つい時代をなるべく軽々と生き抜こうとするさきちゃんたちに優しい気持ちを託して、読む人も希望を持てるようなものを書きたかった」と書かれている。

確かにまた夜がくる。だが、次の夜が来るまで、未来という予想も出来ない時間を持っている。〈でかい、熱い、激しい、波音もものすごい、真夏の荒れた海みたいな未来そのものがあつた〉と語られる「未来」だ。それが「希望」となるのであろう。夜が来るまでに、いかに過ごすか考える事が出来る。

〈なんと豊かで、そしてなんて優しいんだろう、なんでもかんでも飲み込んでくれる未来という概念は。〉作者がそう書いている。

いつも〈軽々と〉とは言い切れぬ語り合いだが、竹原書院図書館の変わらぬご支援をいただいて、安心して言葉を重ねていくことができる。



癒しの豆スープ

いつの間にか無料で豆スープを出し続けるようになった老夫婦によって、次第に周囲の人の心がじわじわ変わっていく物語に、私は、何とも言えない優しく温かな気持ちにさせられた。

文中の「ほっこりとした笑顔になる人たちを見ると、涙が出そうになってしまう。それだからやめられない、人間を、豆スープを。そう思った。自分の中にも極小の悪魔と同時に潜む、そのくめどもつきない愛のかけらみたいなものを、どちらも小さいその消えないものを、味わいたいような気持ちにいつしかなっていた。」の箇所は大好きなところで繰り返し読んだ。誰の心の中にもある善を慕う心に焦点が当てられ、それを呼びさまし、引っ張り出してくれるような気がする。

憎しみの連鎖という言葉は度々聞くが、善が善を呼ぶ善の連鎖もあるということを感じた。「善人洗脳」という言葉を使っているのも面白い。相手からの見返りを求めない善。文中にも、人間ではない、もっと大きなものの存在が度々書かれている。「そんな様子を庭木のところから大きく優しいだれかが見ているようにいつも思えた。」「とてつもなく大きくおおらかなものが、庭の木陰からそっと見ていたと思う。」たとえ、人は誰も見ていてくれなくても、目には見えない存在が見ていてくれるのかもしれない。



今の時代も、生活がしにくく、障害をかかえている人は多い。親戚、家族でも違う生活をしている。

同じさきちゃんとよぶ名前の人達の短編小説である。同級でしゃれたレストランを営む人と無料スープを配ってささやかな人間のふれあいを楽しむ人。しがらみのある人と善意で自発

的な人たち。どちらの生活が幸せなのか考えさせられる。人からみえる生活と、実際に人とふれあうことによって啓発されていくことの違いがよくわかる。

よしもとばなさんの世界の中でたったひとりの私を感じる孤独は都会の中の大勢の人のたったひとりのように、ひしひし感じる。



さらっと書かれた文章の中に不思議が一杯。私の無駄な生活そのものの中から生きて生産し続けていることが無駄でない宝物を発見をこの本から頂きました。

ページ天使の中から「それでもあなたは天使です」と言うことばを神様からの言葉として私自身に言ってみようと思います。

どう使おうと思いの世界は私の勝手ですから

これで軽く生きられるのなら！私の心を解放できるなら！

認めて下さるよね。ね。

あなたの方法で、あなたに語りかける宝物を見つけて欲しいと、よしもとばなさん待ってますよ！



さまざまな環境の中にいる“6人のさきちゃん”の短編集。

読んでいくうちに、自分の心の中にもしっかり住みついている”夜“の部分。たくさんのさきちゃんの苦しさ、“夜”を描くことにより、必ず次には朝が来る(希望)ことを作者は伝えていて、読み終わった後、自分もスッと心が和らいでいくようでした。



短編集のタイトルの物語しか読んでなかったので、あらためて全部読んでみました。「題そのものに意味があるのでは？」と問いかけがあり、他の出席者の感想もとても興味深かったからです。

それぞれのさきちゃん、それぞれの夜(暗い部分、心の内側など)がいていいに、生き生きと描かれていてずっと入りこめました。

物語の結末がハッピーエンドでなくても、なにかしら希望を感じさせる、だから読んだあとにあたたかい気持ちになります。彼女たちもいろいろもがいたり立ち止まったりしている。でも頑張っている。私もまた前を向いていこう、と思える作品でした。

一冊の本についてほかの人と向き合うのもとても刺激になりました。楽しかったです。

◆ 2月課題本 ◆

『似ない者夫婦』

津村 節子/著 河出書房新社

小説で数多の賞をとっている津村節子の随筆集で、45編を収めている。いかにも、書きためたものを文箱から取り出しましたという雰囲気、5章のくくりにしてあるものの、さしてテーマにこだわっているとも思えない。どこでも、おすきなところからお読みくださいと、ざっくばらんにうち広げた格好だ。

題名だけ見ると、夫である吉村昭氏との作家夫婦の日常描写かと思うが、吉村氏はほとんど登場しない。一般的には「似たもの夫婦」という方が通りもよく使用頻度も高い。それに対して「似ない者夫婦」と言われると、どれだけの差異があるのかと興味を持ったが、識別できるほどのことはなかった。

文中に吉村昭氏がほとんど登場しないので、逆に吉村氏についての興味がわいて、吉村氏と作者が共にかかわっていた岩手県田野畑村が話題になったりした。特に、今回のテキストには出てこないが、吉村氏の最期についてかなりの時間を割いた。自ら、病床にある身の生命維持装置を引き抜き、肉体の終了を意志のままに果たしたといわれる氏の人生の閉じ方についてである。何をもって「死」と名付けるかということも問題になったし、「一般的死」は思考し語れても、「私の死」は同じ線上にはないのではないかと話が出た。津村節子の他作品を見ても、夫の死についての描写は、冷静で激するところが感じられない。文を書くために対象をよく観察する態度は、常に対象と距離をおくという習性になっているのであろうか。

吉村氏は「学者は歩かないが、私は歩く」と言って取材旅行をよくしている。そこから生まれた作品に、あらためて触れる意欲もよびおこされる付随効果を持つ「～夫婦」という題名であった。

1928年生まれの津村節子だから、1937年から中国大陸や南方に拡大していった日本の軍事路線を子ども期に過ごしている。しかし、その時期を書き留めるところは少なく、今回の随筆集は、戦後を中心にしていて、身辺雑記の集まりだ。

この作者は、随筆というものについてく 何げなく見過ごしてきたことをよくみるようになり、肉親や人とのふれあい、日常の日々など改めて考えることになる。無駄なことははぶき、強

い印象、感動を与えるためには、構成力、文章力が必要である」と指南している。この作品集は、そのモデルなのであろうか。

小説家仲間のつながりについて、文壇とか同人とか女流文学者協会とかが出てくる。文壇などに馴染みはないが、聞いたことのある作家の名前がいくつも挙がっている。ここから、その作家の作品に分け入っていく方法もあるのだろう。これほど作品の掲載数が多い随筆集となると、読書会でも好みバラバラで、それぞれの思いを傾聴して楽しんだ。



～夫婦の関係は、「根っこ」では、繋がっている～

今回の課題本は「随筆」というジャンルのものです。筆者の身に起こることや見聞きしたことを「ことば」にしたものだから、勝手に「物語」を見つけることはできないなあと思いながら読み進めました。テーマは、作家である夫婦の人間関係だろうと思い……。そうした読みを進める中で、私に分かる「地名」や「人名」にぶつかり、実際の本には著されていないことを「掘る」読みの愉しさを味わいました。

『似ない者夫婦』の「IV 折にふれて一遍路の便りー」夫である吉村昭氏の作品『星への旅』の舞台となった、三陸海岸の岩手県「田野畑村」と当時の村長「早野仙平」という固有名詞に出合ったのです。この時は、すでに作家として評価もあった吉村昭氏の取材の旅に同行された時のことである。当時の村長である早野仙平氏と将基面誠医師の話が中心であるが、その当時の村立小学校の校長との出会いもあったのです。しかもその人は、「吉村さん俺も武蔵に乗っていたんだよ。」と、生き残ることのできた一人であることを明かされたそうです。「戦艦武蔵」のことは、自分の息子さんにもほとんど話されていません。この校長の息子さんが、私が在職していた学校の校区内にお住まいで、その息子さんも元小学校の校長でした。「死」に向き合った作品が多い吉村氏。『戦艦武蔵』もそうであろうけれど、元乗組員であった校長は「武蔵の生き残り」であること、「死」と対峙した者として、「いのち」を育むことを大切に、戦後の教育に対峙されたように思える。実の息子には多くを語ることはされなかったようですが、時代に遺された「こだま」を届けてくれるのが作家の仕事なのだと深く感じる事が出来ました。

吉村氏と津村氏の表現の方法は違っています。「写真」と「動画」(本文中には「人間ビデオ」の表現がありました。)のような違いがあっても、「テーマ」は地下でしっかりと繋がっているのだということが理解できました。妻である津村氏も「死」について作家としても向き合うことを忘れなかったことを『紅梅』から感じた。また、津村氏の夫亡き後子どもや孫とともに田野畑村を訪れた時の『三陸の海』は、吉村氏の『三陸海岸 大津波』に遺された「こだま」を生かしていくものであったのではないだろうか。

夫婦とは「似ない」のではなく根の部分ではしっかりと繋がり、同じ源流から水を吸い上げそして、相手を尊重しながらの関係を創っているのではないだろうか。読書会でないとな

い「掘る」愉しさを味わいました。また、なつかしい人たちと再会することもできた2月の課題本でした。



題名から入って、他人の死は本に書けたり、死にむきあうことが出来るが、自分の死のとらえ方が難しいと分った。

人間の肉体の死より、残した言霊や当人の行いが人の心の中に残るのがとても恐い。今日は本当に永遠のテーマを聞きました。



自業自得——私には学習能力がない。私共夫婦は年の差10歳、考え方、娯楽、嗜好が全く違う。

今迄読書はほとんどしてない。健康に関する本だけ読んでいた。読書の大切さが少し分った様に思う。



◆ 3月 ◆
『今年の一冊』

枠内は TRCMARC 内容紹介より

『新・ローマ帝国衰亡史』
南川高志／著 岩波書店 2013年

地中海の帝国と言われるローマ帝国は、実は「大河と森」の帝国だった？ 衰亡の最大原因とされる「ゲルマン民族」は存在しなかった？ 歴史学の最新の知見から、ローマ帝国の衰亡史を描く。

歴史って私の生活の中にあるよね！ 見つけ出す時、ウッオー、と大感激！

『職業は武装解除』
瀬谷 ルミ子／著 朝日新聞出版 2011年

紛争地には兵士以外の職業がない。生き方を選べる環境を届けるために、私は武器を回収するプロになった…。30代の若さで『Newsweek日本版』の「世界が尊敬する日本人25人」に選出された著者が、自らの軌跡を綴る。

武装解除という私がつもっていた認識を変えてくれた本でした。
瀬谷さんの志と行動力に心を打たれました。平和とは、自分で選択できること。
戦争が終わるとすぐに平和が訪れるのではないことは理解しているつもりでしたが何も理解できていない自分に気付きました。もっと勉強しなければと思いました。

『芸人と俳人』
又吉 直樹／著 堀本 裕樹／著 集英社 2015年

作家としても注目を集める芸人・又吉直樹が、気鋭の俳人・堀本裕樹に弟子入り。ひそやかな2年の学びをまとめる。書き下ろしエッセイや実作俳句20句も収録。『すばる』連載「ササる俳句 笑う俳句」を単行本化。

『『湖の伝説』—画家・三橋節子の愛と死—』
梅原 猛／著 新潮社 1977年

ガンにより35才で他界した画家 三橋節子(1939～1975)の生涯です。

ガンで右腕を失い左手で書いたたくさんの作品は二人の子供(3才・5才)への愛情にあふれています。「幸せやった」と周囲の人に感謝して死んでゆきました。著者は「節子さんは愛を忘れた現代人に愛の尊さを教えるために仮に人間となって現れた聖女であったような気さえ私にはするのです」と。

私のはじめてこの本に出あったのは発行された頃です。同年代だったのでストーリーに涙ずっと心に残っていました。このたびは梅原氏の解説や感想をゆっくりと読ませてもらいました。

『与楽の飯 東大寺造仏所炊屋私記』
澤田 瞳子／著 光文社 2015年

奈良時代、国家の威信をかけた大事業、東大寺大仏建立。そこで働く若者・真楯は、造仏所炊屋の絶品の飯を心のよりどころに、厳しい労苦に耐えるうち、食とは、仏とは何かに気付いていく…。『小説宝石』掲載を単行本化。

『第九軍団のワシ』
ローズマリ・サトクリフ／作 猪熊 葉子／訳 岩波書店 2007年

ローマ軍団の百人隊長マーカスは、ブリトン人との戦いで足を負傷し、軍人生命を絶たれる。マーカスは親友エスカとともに、行方不明になった父の軍団とその象徴である「ワシ」を求めて、危険に満ちた北の辺境へ旅に出る…。1972年刊の再刊 原タイトル:The eagle of the Ninth

『経済学は人びとを幸福にできるか』
宇沢 弘文／著 東洋経済新報社 2013年

「社会的共通資本は市場原理主義では守れない」「福祉は制度化できるか」など、哲人経済学者・宇沢弘文が、人間の心を大切にする経済学の基本的な考え方を明らかにする。池上彰の解説付き。

『村上海賊の娘 上・下』
和田 竜／著 新潮社 2013年

和睦が崩れ、信長に攻め立てられる大坂本願寺。海路からの支援を乞われた毛利は村上海賊に頼ろうとした。その娘、景は海賊働きに明け暮れ、嫁の貰い手のない悍婦で醜女だった…。『週刊新潮』掲載を加筆修正し単行本化。

『言葉屋 言箱と言珠のひみつ』
久米 絵美里／作 もとやままさこ／絵 朝日学生新聞社 2014年

小学5年生の詠子のおばあちゃんの仕事は、「言葉を口にする勇気」と「言葉を口にしない勇気」を提供するお店、言葉屋だった! 詠子は言珠職人の見習いとしておばあちゃんの工房に入門し…。

最近、言霊とか大和言葉とかよく目にします。小学生向きの小説でありながら、よく考えながら読んでいかないと難しい本です。

言えなかった言葉を入れてしまっておく箱を言箱といいます。そしてそれらをもとにして言霊を作っていくのですが、言葉屋のお仕事は、そうではなく、言霊を言う勇気と言ってはいけないことを言わない勇気なのでした。

他にも、おしゃれをする時の本当の勇気、動機とは何かも考えさせられます。大人でさえも何回かよん

で初めて味わえる本です。

『小鳥の贈りもの おおぞらに向かって飛び立つあなたへ』

ビルッコ・ヴァイニーオ／作 山川 紘矢／訳 山川 亜希子／訳 KTC中央出版 2013年

小さな鳥のひながいろいろな経験をつんでかしくなっていく、飛び立つまでの物語を通して、「生まれてきたわけ」「過去にこだわらないこと」など大切なメッセージを伝える絵本。

PHP研究所 2008年刊の新装版原タイトル:Voor wie wil vliegen

今年も絵本の紹介です。この本とは偶然の出会いでした。

絵本のなかに素敵な言葉、自分の中に覚えておきたい言葉がつまっています。

人と比べないこと、自分の力で経験すること、時には休むこと。いつだれが読んでもなにか得るものがあると思います。機会があればみなさんの前でも読んでみたいです。

私のおすすめもの『朝日新聞』

朝日新聞連載「新聞と9条」「プロメテウスの罫」「声 オピニオン&フォーラム」等…2015年は被爆70年という事もあり読みごたえのあるものが多かった。「プロメテウス」は原発事故関連が多く本当に考えさせられる。夏目漱石の「心」「それから」「門」等の原文の連載。

『晴子情歌 上・下』

高村 薫／著 新潮社／発行所 2002年／発行年

遠洋漁船に乗り組む息子のもとに大量に届き始めた母・晴子からの手紙。そこにはみずみずしい15歳の少女がおり、未来の母がいた。息子・彰之は初めて母という名の海へ漕ぎ出していく…。

『新リア王 上・下』

高村 薫／著 新潮社／発行所 2005年／発行年

父と子に立ちはだかる壁はかくも高く険しいものなのか。「終わりの始まり」が露見した永田町と、核がらみの地域振興に手を出した青森。政治一家福沢王国の内部で起こった造反劇は、父から息子へと決然と語り出される。上巻。

『太陽を曳く馬 上・下』

高村 薫／著 新潮社／発行所 2009年／発行年

福沢彰之の息子、秋道は画家になり、赤い色面ひとつに行き着いて人を殺した。一方、ひとりの僧侶が謎の死を遂げる。人はなぜ描き、なぜ殺すのか。9. 11の夜、合田雄一郎の彷徨が始まる。『新潮』連載を加筆修正し単行本化。